

## La grande fête du Mont Kanasa et son Histoire de l'origine

Junichi Shida

志  
田  
諄  
一

La grande fête du Mont Kanasa aura lieu en mars 2003. C'est une fête religieuse très rare et exceptionnelle même au Japon. Elle ne se célèbre que tous les soixante-douze ans. Selon l'Histoire de l'origine du temple shintoïste de Kanasa de l'ouest et de celui de Kanasa de l'est, le dieu de ces deux temples est Onamuchi-no-kami. Il arriva en conchille d'abalone du Mont Hiei à la plage de Mizuki. Et les villageois le transporta au Mont Kanasa pour le déifier. Ce fut en mars 806, la première année de l'ère de Daidô. Désormais, la fête est célébrée tous les soixante-douze ans pour souhaiter la paix du pays et la récolte abondante. La première fête se célébra en 851, la première année de l'ère de Ninju sous le règne de l'empereur Montoku et la dernière, c'est-à-dire la seizième fête eut lieu en 1931, la sixième année de l'ère de Showa. Et donc la prochaine fête sera en 2003, la quinzième année de l'ère de Heisei.

Les faits historiques racontés dans l'Histoire de l'origine du Mont Kanasa sont-ils vraiment fiables? Il faudra les analyser avec précaution. Cette présente étude montrera le contexte politique et sociale de la grande fête du Mont Kanasa.

金砂田楽に関心を示したことが考えられる。しかし、最大の理由は寛永の検地に際して起こった領民の動揺・抵抗と、その後に水戸藩領を襲った大飢饉に対応するために大祭礼を復活せざるを得なかったのであろう。

徳川頼房は大祭礼再興にあたって、西金砂山側に祭礼の執行を命じた。驚いた東金砂山側は急いで大祭礼の由来を書きあげ藩庁に訴えている。<sup>(20)</sup>この訴状によると西金砂別当と田楽大夫が、「謀計」をもって東金砂山の祭礼を潰そうとして、役所になにかと虚言を申し上げたということである。それには西金砂別当と田楽大夫次郎兵衛が金砂別当に「少々遺恨之事」があったので、東金砂は祭礼を勤めることができない、などと御公儀様に虚言を申し出たことになっている。東金砂山東清寺が佐竹氏の国替に応じて、秋田に移ってしまったので現在残っている東清寺には、大祭礼を行う資格がないと非難したのである。これに対して、常陸に残った東金砂山王権現と別当東清寺は、秋田に移った東清寺は後にいう末寺であって本山は不変であると主張したものである。しかし、藩庁は佐竹氏と行をともした東清寺に対し含むものがあつた。そのため西金砂山に大祭礼の再興を指示し、三月朔日に祭礼が行われたのである。東金砂山側は急いで大祭礼の由来を書き上げ、天下野村外六か村の村役人連判をもって祭礼参加を訴えたのである。このとき東清寺によってまとめられたのが「金沙山縁起」である。

#### 註

- (1) 西金砂神社・東金砂神社『金砂神社田楽舞』昭和五十一年三月。金砂郷村史編さん委員会『西金砂の祭礼と田楽』金砂郷村 昭和六十年三月
- (2) 彰考館所蔵
- (3) 『続日本後紀』
- (4) (5) 『三代実録』
- (6) 『文徳実録』
- (7) 秋田藩家蔵文書
- (8) 小田部庄右衛門氏所蔵文書
- (9) (10) 西金砂神社文書
- (11) 花園教之氏所蔵
- (12) 吉田一徳『常陸南北朝史研究』水戸二高史学会 昭和二十八年四月 一四七頁
- (13) 国立国会図書館所蔵
- (14) 伊沢慶治氏所蔵
- (15) 彰考館所蔵
- (16) 『茨城県史』中世編 昭和六十一年三月 五八一頁
- (17) 『新編常陸国誌』巻五
- (18) 静嘉堂文庫所蔵
- (19) 国立国会図書館所蔵
- (20) 菊池健晴氏所蔵文書 菊池健晴「東、西金砂山大祭礼磯出御幸論争のこと」(『郷土文化』三十三号)

まさに大祭礼が西金砂を中心に行われようとしていた情況に抗議するため、急いで縁起をまとめた形跡がある。さらに東清寺は、大祭礼の七十三年目という年次にも懐疑的である。

金沙山縁起には、「大は七十三年春」として大祭礼の神事を七十三年の春ごとに行う、と記している。それにもかかわらず「私に曰う」あるいは七十三年、あるいは七十五年、また八十年としているのは問題である。おそらく、この縁起が書かれたころ、大祭礼の年次を定期的に「七十三年春」とするのに疑問があったことを示している。大祭礼執行の年を康平四年（一〇六一）辛丑、長承二年（一一三三）癸丑、元久二年（一一三五）乙丑、建治三年（一二七七）丁丑、観応元年（一二三五）辛未、応永三十四年（一四二七）丁未、明応八年（一四九九）己未、元龜元年（一五七〇）辛未として八度の年次を記している。その中で、観応元年を「辛未」としているが「庚寅」の誤りである。元龜元年を「辛未」としているが「庚午」の誤りである。もし『新編常陸国誌』が指摘するように、この縁起が「天正ノ頃ニ伝写」したものであれば、天正の前の年号である元龜元年の干支を間違はずがない。

それでは、なぜ東金砂山側では磯出の神事と田楽の第一回を康平四年に当てたのであろうか。『常陸国北郡里程間敷之記』には、西金砂山「治暦三年丁未大田楽磯出始ル」とし、『水府志料』<sup>⑧</sup>水木村の項にも、「金砂山祭礼、七十二年に一度づつ磯出大田楽あり。治暦三丁未の年、始て祭りしより十四度に及ぶと云」とある。このことは、磯出と田楽の神事（大祭礼）の始まりを治暦三年（一〇六七）とする考えが両金砂山側にあったことが知られる。そこで東金砂山側は、治暦の前の年号である。康平四年を磯出の神事と田楽の始めとして、西金砂山より優位に立とうとしたのである。だいたい治暦三年を磯出・田楽の始めとする西金砂山側や、康平四年を始めとする東金砂山側の主張でさえ

疑わしいのであるから、それ以前の大祭礼の執行年次が正しいものとは考えられない。

#### 四

金沙山の大祭礼は、佐竹氏が常陸守護として、常陸一国の安泰のために執行したのである。佐竹氏が常陸一国とかかわりを持つのは、佐竹貞義のときである。足利尊氏が武家政権を再興すると、小田氏に替えて貞義を常陸守護に任じた。以後、常陸守護職は義篤・義宣（義香）・義盛に継承された。義盛の養子義憲（義人）のとき一族の山入祐義との間に半国守護として併置されたことがあったが、義憲の子の義俊・義治・義舜・義篤と佐竹氏の常陸守護職は引き継がれたのである。

守護は鎌倉幕府の時代では、軍事指揮官としてのほかに地方官吏の性格を兼ねていた。室町幕府も守護を吏務職、つまり国司の職として性格づけようとしたことが、建武式目やその後の追加法によって明らかである。

慶長七年（一六〇二）五月、佐竹氏が秋田に国替されると金砂山は庇護者を失い危機を迎えることになった。旧佐竹領の検地が行われ、金砂山はわずかに二十四石の社領が認められたのである。これでは祭礼どころか、寺社の運営維持すら困難となった。初代水戸藩主徳川頼房は、佐竹氏の庇護のもとに繁栄してきた金砂山に格別の関心を持っていたにちがいない。さらに佐竹氏の国替とともに秋田に移った東金砂山東清寺の動向などには快く思わなかったのである。

ところが寛永二十年（一六四三）に、徳川頼房は大祭礼を執行したのである。なぜ水戸藩は佐竹氏と密接に結びついてきた金砂山の大祭礼を再興したのであろうか。その理由として、一つは頼房が寛永十三年（一六三六）の日光東照社正遷宮式に演じられた田楽に刺激されて、

す。所以の者は何ぞ。田楽なる者、稻登り、風難の消除の為に之を行ふ。是れ曷<sup>なん</sup>ぞの故か。今、此の田楽は、龍宮の為に廻行し、稲花実る所、悪風起こらず、五穀実を成す。獅子は悪鬼を吹き、風を九穀に息ましむ。九穀登らざれば、故に衆生匱<sup>きん</sup>乏して飢死す。茲に因つて、獅子舞う。故に悪魔・悪龍・此の舞を見て悚<sup>しょう</sup>驚、粵<sup>こく</sup>に以て悪風の難を通る。故に七八の両月、専ら之を勤むる者なり。仍つて、七十三の春の祭祀は、垂迹の全徳を顕らかにする故に磯出、之を勤む。七年廻宮中御行。飢年の為に、田楽を之勤む。其の役者事

王躰の住まる時はなり

王躰は薬師の表想なり、是れ則ち天逆鉾を取り着け、海底より上り給う。老翁、この界に薬師如来を主るを表す。而して是れの如く住る時は、当山の当主なりと。表す乎<sup>かな</sup>。抑平城以往、二百五十五年後、康平年中の飢饉に、磯出の神事に鑒<sup>かん</sup>み、田楽舞を行うの初なり。康平四年辛丑、東金沙は三月一日、西金沙は三月三日なり。末代の為に之を記す。

康平四年辛丑 三月二日

真頼 判

私曰う、或いは七十三年、或いは七十五年、亦は八十年、豊年に依り、両祀之を勤む者なり。

七拾三廻りの磯出の初め、大同以往二百五十五年後、康平始め而王代三十九代の間、八度の御磯出の年、並びに百十余年、当年月を謂<sup>い</sup>え者、

康平四年辛丑三月一、三日

長承二年癸丑同月同日

元久二年乙丑同月同日

金砂大祭礼と金砂山縁起

建治三年丁丑同月同日

観応元年辛丑同年同日

応永三十四年丁未同月同日

明応八年己未同月同日

元龜元年辛未同月同日

この縁起について『新編常陸国誌』は、「是縁起ハ康平四年ニ記セシモノト云、然レドモ非ナリ、思フニ足利將軍ノ時世ノモノト見ユ、今伝ル所ハ天正ノ頃ニ伝写セシ本ト見ユ」とする。また金砂の祭礼は、風祭りである龍田の立野社を移したのが金砂権現で、この社の祭祀は上古より風雨の難を払い五穀の豊登を祈る社であった、と述べている。しかし、金砂権現は風伯などではない。またこの縁起は、足利將軍のころに書かれたものでも天正のころに伝写されたものでもない。

この縁起で強調されているのは、飢饉の年に神事を行うべきこと。大祭礼は七十三年目の春に、必ず両山の神事として行うこと。この祭りは、決して一山の神事ではないこと。小祭礼は、七年ごとで、必ず和して（両山仲よく）勤むべきこと。飢饉の年のために、田楽を勤めること、などである。中山信名の『常陸遺文』<sup>18</sup>によれば、金砂山縁起は東金砂東清寺より出たものである。東清寺が大祭礼は必ず両山の神事として行うこと、一山だけでは神事にならない。小祭礼も両山必ず和して行うべきことを強調しているのは、こうした内容の縁起を書かざるを得ない事情が起きていたことを暗示している。また、飢饉が現実<sup>じげん</sup>に起きていたことを物語っている。しかも康平四年（一〇六一）の磯出・田楽は、東金沙が三月一日、西金沙が三月三日に執行したことを「末代の為に之を記す」として、東金砂を優位に記しているのは、

る。

中染の地は、大祭礼のとき、西金砂では最初に田楽を修行、東金砂でも最初に護摩執行をする所なので、重要な聖地とされていたのである。しかし、『吾妻鏡』を初めとし中世の史料には、金砂山を東西に区別していない。金砂山はいつから東西に分けて呼ばれるようになったのであろうか。縁起や書付にあるように、最初から東西に分かれていたとは思えない。筑波山のように、峰が二つに分かれているならば東と西や男と女の区別をつけて呼ぶことができるが、東金砂山と西金砂山は全く別々の山なのである。それにもかかわらず、どちらも金砂山と呼ばれるのは、宗教上の理由に基づくからである。おそらく、元は金砂山といえは西金砂山を指していたのである。

ところで、この問題について次のような説がある。いつのころからか、金砂山から東に見通せる線上にある東金砂山や豎破山にも山王権現が勧請されて、東金砂山、西金砂山が相對するようになったというのである。<sup>16</sup>しかし、この説では山王権現を勧請する以前から東金砂山と呼ばれる山が存在していたことになる。また山王権現の教線が東にだけ延びたわけではない。山王権現は真弓山にも勧請されているのである。おそらく、東金砂山はかつては別な名をもつ山であったにちがいない。

西金砂山の神社や寺院は、天然の要害の地にあつたので佐竹氏の城郭として利用されることになったのである。治承四年（一一八〇）十一月、佐竹氏の籠城する金砂山攻略に苦戦した源頼朝は、佐竹氏を敗走させて山頂の城壁を焼き払った。このとき神社や寺院も兵火にかかったものと思われる。頼朝は金砂山が再び戦略上の拠点になることを恐れ、西金砂山を中心とする信仰を別の山に移すという宗教政策をとったことが考えられる。

その別な山を金砂山と名付けたのである。佐竹氏に代わって、久慈郡の地を支配したのは二階堂氏である。やがて、時が過ぎ幕府の久慈郡支配が安定すると、西金砂山の信仰も再びよみがえってきたのである。久慈郡の地を失った佐竹氏も二階堂氏と縁戚関係を結んで、父祖の地への回帰を企てたのである。「正宗寺旧記」<sup>17</sup>に「昔者金砂別当職ヲ増井ハ二階堂殿寄附ナリ、建治年中ナリ」とみえる。ここにみえる金砂当別職は、西金砂山の別当職であらう。二階堂氏は、それを勝楽寺に寄進したのである。

こうして、西金砂山の信仰が回復すると、二つの金砂山が存在することになったのである。そのため、西と東の名を冠することによって区別したことが推測されるのである。

『諸事文書纂』所収の金砂山縁起に関するもので、もつとも興味深いのは（四）の次の文書である。

#### 金沙山縁起

夫れ金沙権現は、平城天皇の御宇、大同元年丙戌三月二日、宝珠和尚、両山を開く。而して山王二十一社を立て、国家を鎮護し、大靈験を顕わすを為せり。本、黄金の膚迹に九穴の鮑躰に現れる所を以て、金沙権現と目す。迹を両山に垂れ、広く衆生を度す。東金沙山は、東方の淨瑠璃王、衆病悉く除くことを主る如来なり。西金沙山は、南方の能化、大慈悲をもつて衆生の満願を主る大士なり。故に両嶺の風情、金胎を表して、東西に山を開く。今、此の両山の権現は、誓願中に万民の怒然たる悲しみ給う故に、富饒を求むるを為せば、富饒を得。当に飢年に神事を勤行すべし。

大は七十三の春 両山の神事 一山を欠くは非

小は七箇歳なり 神事は必ず和して勤むべし

是れ寔に、五穀咸登るの祭祀、実穂、風難の稲に当たらざるを為

付、田楽は場を中染村に引き申し候」とあるのも問題である。童子がさらわれたことが、なぜ田楽の場を中染村に引くことになったのだろうか。さらわれたという童子は、どういう素性の者なのか、さらったのは天地坊なのか、この記事では明らかでない。

ところで「篠崎筆記」<sup>〔5〕</sup>に、次のような話がみえる。佐竹義仁に男子が生まれ、名を徳千代丸と呼んだ。徳千代丸が十三歳になったとき、神かくしにあつて急に行方不明になってしまった。両親は嘆き悲しみ、諸国を尋ねて探しまわり神仏にひたすら無事を祈った。そのころ、九州からきた万固という禪僧が村松虚空藏堂にこもり、寺の建立を志して百日の願をかけた。満願の日の明け方、虚空藏尊から利生に、古い菅笠を賜った。万固はこの笠を冠り、ひもをしめようとする、自分の身が「ツルツルト天二上ルト思へば」、岩石がそばだち人の住居などあるはずがない所に移っていた。ふとあたりを見ると、金銀の砂をしきつめた、えもいわれぬ家があつた。すると十二、三歳の少年が現れ「汝はどこからきたのか。ここは天狗の御殿である」といった。少年はさらに「やがて大将の天狗が汝と対面するが、そのとき金銀の引き出物をくれるから、それを辞退しかわりに私を所望しなさい」といつて帰った。まもなく、背のたけ一丈ほどに見える白髪で山伏の姿をした天狗が現れた。いろいろ万固をもてなし、金銀の引き出物をくれた。そして「この上にも、どのような望みもかなえてやるから遠慮なく申せ」という。万固は「それはありがたいお言葉であり、引き出物はくださったことはうれしいが、それよりもあそこにいる少年がほしい」といった。天狗はしばらく考えていたが、やがて「まことに無念なことである。だが、私の言葉に偽りがあつてはならない」といつて、少年を万固に渡した。万固は少年をつれ笠を冠つて大空に飛び上がったと思うと、佐竹義仁のいる太田城に着いた。折からそこ

にいた侍が見つけて義仁に申し上げた。義仁は走ってきて徳千代丸に取りつき、喜ぶこと限りがなかった、ということである。

徳千代丸（のちの佐竹義俊）がさらわれてきたところは、岩石がそばだつており、ふとあたりを見ると「金銀の砂」をしきつめたえもいわれぬ家があつた、というから金砂山のことであろう。佐竹義仁・義俊・義治・義舜の時代は、佐竹の乱で大祭礼の執行などは不可能であつたにちがいない。義篤・義昭・義重の時代でも戦乱に明け暮れていたのである。東金砂山には、多くの法師武者がいて活躍したので、天狗の伝説に発展する要素が存在していたのである。佐竹の乱では、佐竹義盛の養子として国入りした鎌倉執事上杉憲定の二男竜保丸（義憲・義仁とも殺す）や、その子の徳千代丸などを守つて戦つたのである。天地坊の伝説にも、そうした背景があつたのではないだろうか。

（三）の西金砂山書付に、「金砂山に西東の称号を分け申す事は、開基以後、何れの由緒も御座なく候」とあるのは、初めから金砂山と呼ばれる山が二つあつたことを前提としているようである。地域の山に呼び名を付ける場合、別々の山に全く同じ名を付けるであろうか。西金砂山書付には、「如何様両山の間より名付け申すようになされ候」とある。要するに、両山の中間の位置から見て、東と西に名付けた、というのである。まことに単純な命名の仕方である。では「両山の中間」とは、どのあたりを想定しているのだろうか。

『常陸国北郡里程間数之記』には、芸園小記を引用して次のように述べている。平城天皇の大同元年（八〇六）に、比叡山の山王権現のうち彌陀・薬師・釈迦の三如来を金砂山の麓、中染村に勧請した。その所を権現塚という。同所の小屋場という所に仮屋を建てた。その西の井という井の内から海砂が湧き出る。その後、三如来を西・東の両山に移し奉る祭りの節、三如来の真影を井の水で注ぐ、というのであ

寺社御奉行所

(二) 此のたび東金砂山石塔御尋に付申し上げ候事

一 治承四年の比、当山に天地坊と申す法師武者御座候由申し伝え候、其の比、佐竹の乱と申す事御座候由、其の後は右の天地坊則ち天狗に罷り成り、当山の住持宥賀法印の時代迄殊の外荒れ申し候由、其の時分迄は田楽当山にて仕り候処に、童子一人さらわれ申し候に付、田楽は場を中染村に引き申し候、之に依り中染村にて仕り候田楽は、東金砂田楽に御座候事

一 右の天地坊の儀、石塔造立仕り則ち宥賀法印加持致され候て以来、山中静かに罷り成り候、童子も塚に仕り、童が墓と申し候事

元禄三庚午四月 日

東金砂 別当東清寺

(三) 西金砂山書付

一 此の寺開基大同元丙戌年三月十三日、宝珠上人、平城天皇の御願所山王権現を勧請せしめ并せて当寺造立仕り候

一 金砂山に西東の称号を分け申す事は、開基以後何れの由緒も御座無候、如何様西山の中間より名付け申す様になされ候、西山は  
大同元年、東山は大同二年の建立と申し伝え候

四月 西金砂山 定源寺

寺社御奉行所

東清寺と定源寺から寺社奉行所に提出された縁起・書付には、秋田東清寺がまとめた「金砂両山大権現大縁起」に見られなかった宝珠和尚が登場する。しかも金砂両山の開山を大同元年(八〇六)、大同二年としている。宝珠和尚は大同元年に、比叡山の山王権現を勧請して金砂山を開いたというが、最澄が唐より帰朝し、天台宗を始めたのは延

暦二十四年(八〇五)である。また朝廷に表を提出して天台法華宗の開立を請うて勅許されたのが大同元年である。

丸山可澄も「金砂山日吉神社縁起」で、「大同元年丙戌歳、天台沙門法殊、日吉山王権現を勧請す」としているが、天台宗の開立が勅許された年に天台宗寺院が金砂山に開山されたとは思われない。それに宝珠和尚なる人物も定かではない。寛文三年(一六六三)に水戸藩で作成した『鎮守帳』に、鷲子村の三所権現社の末社「宝珠上人社」が記されている。鷲子山上神社は、天日鷲命を祭神とし大己貴命・少彦名命を配祀する。社伝によれば、大同二年(八〇七)、宝珠上人が朝日岳に建立したのが始まりという。

加藤寛斎の『常陸国北郡里間敷之記』には、祠官鷹巢伊勢の祖先は「金砂山開山宝珠上人ト共ニ吉田ヨリ来、当伊勢迄四十一代相統」とあるので、鷹巢氏との結びつきで登場し、吉田神道との関連で浮上する人物のようである。

(二)の東金砂山と天地坊の話も注目される。治承四年(一一八〇)のころ東金砂山に天地坊という法師武者がいたと申し伝えられている、というのは分かる。しかし、「其の比、佐竹の乱と申す事御座候」とあるのは不審である。ここでは源頼朝と佐竹秀義が戦った金砂合戦と佐竹の乱を同時期と考えているようである。佐竹の乱の後、天地坊は天狗になり、宥賀法印の時代まで荒れまわったというのである。宥賀法印は『常陸国北郡里間敷之記』に、「天地坊ノ爪ヲ宥賀法印ニ贈ル」とし、その時期を「元龜」と記している。

そうすると天狗になった天地坊は、十五世紀から十六世紀初めにかけての佐竹の乱から元龜に至る戦国時代まで東金砂山に住み、佐竹氏の合戦のときはたびたび現れて活躍を示したということである。次に「其の時分迄は田楽当山にて仕り候処に、童子一人さらわれ申し候に

ろう。

秋田市保戸野に、「金砂町」という町名がある。かつては久保田城の城下町で、町名は金砂神社にちなんでいる。金砂神社は佐竹氏国替のとき、秋田に移ってきた。初代別当は、東清寺七世の宥玄法印である。「秋田藩神社及祭典次第」によれば、境内「東西八十三間余、南北三十七間余」とみえる。境内には別当東清寺のほか、嬬桜神社の別当寺医王山宝源寺があった。嬬桜神社と別当寺は、伝承ではもと太田城下にあった寺社で、祭神は佐竹十一代義宣（義香）の娘五陵の宮といわれている。五陵の宮は、生まれつき容貌が醜かったので、周囲の者も気をつかい鏡を見せないようにしていた。二十歳になったとき（応永年間という）、金砂山に参詣した。その折、手洗い鉢に映った自分の顔を見て、悲しみのあまりに井戸に身を投げた。天死した娘の菩提を弔い、霊を鎮めるために義宣は城下に寺社を建立した。それが嬬桜神社と宝源寺なのである。

佐竹氏の秋田国替とともに、太田から久保田城下に移されたが、文政七年（一八一四）に金砂神社境内に再度移されたのである。明治維新までは、「御霊堂」とか「礼堂」と呼ばれていたというから天死して荒人神に祀られた義治の娘と同じ御霊権現の信仰があったことになる。娘の名の「五陵の宮」も「御霊」のことであろう。維新後もなく境内の建物の多くが焼失し、寺院は廃寺になっている。

佐竹氏の息女が、二人までも天死して荒人神となり金砂山と結びついているのが注目される。あるいは、佐竹時代の大祭礼には佐竹氏の息女が重要な役割を果たしていたのであろうか。

以上みてきたように、「金砂両山大権現大縁起」は、「両山」とはあ  
るが、とくに後半は東金砂山中心に書かれている。前半は比叡山延暦寺と金砂山の結びつきを強調し、後半は佐竹氏と金砂山の密接な関係

を主張している。このことは、金砂山がある時期に比叡山の日吉山王権現を勧請して信仰を集め、佐竹氏の庇護のもとに発展してきたことを物語っている。また、佐竹氏に加護を与える寺社として、佐竹氏と譜代の家臣たちの精神的な拠りどころとして存在していたのである。だからこそ、佐竹氏の秋田移封のときに秋田に金砂権現が東清寺とともに勧請されたのである。宝永二年（一七一〇）には、常陸の西金砂神社の神霊が分祀されて、秋田佐竹氏とその家臣団によって崇敬され続けたのである。秋田金砂神社は、父祖の常陸時代をしのぶ大事な象徴的存在だったのである。

それにしても、「金砂両山大権現大縁起」に、大祭礼の記事がないのは残念である。おそらく、佐竹氏が秋田に国替したので、常陸国の鎮護や豊作を祈願する必要がなくなったことが縁起に記されなかった理由の一つであろう。

### 三

『諸寺文書纂』には、金砂山縁起に関する次の四種類の文書を載せている。原文は漢文なので、読み下して紹介しよう。

（一）両金砂元来の御尋に付申し上げ候事

一 当山は大同元丙戌年三月二日に宝珠和尚御開山に御座候、東西両山は金剛界・胎藏界の両部を表し、開基成され候事

一 当四年以前に秋田東清寺より金砂両山大縁起遣わされ候、此の縁起には、文武天皇御宇大宝二年、役鳥婆塞の草創、それ以後慈覚大師広く再興の靈区なりと御座候事

東金砂別当 東清寺

元禄二年 四月二十四日



寺本陣となされ」とあるので、東金砂山に佐竹氏の城郭があったことを前提として、縁起が執筆されている。

しかし、『新編常陸国誌』巻六は、「両金砂ノ地形ヲ考ルニ、イツレモ劣ザル高山ナリ、然レドモ西金砂ハ、三方尤嶮岨ニシテ、後ノ路三方ニ比スレバ、大キニ登リ易シ、実ニ要害無双ノ地ニシテ、東鑑ノ文ニ符号セリ、且天下野村ヨリ登ル所ノ道ニ、合戦坂、横落等ノ名アリテ、佐竹敗北ノ節、落タル所ノ由古老ノ伝説モアレド、西金砂タルコト疑フベカラザルニ似タリ」とし、義篤・義舜が籠城したのは西金砂山のこととする。

吉田一徳『常陸南北朝史研究』<sup>12</sup>も、佐竹貞義は西金砂山に要害堅固な城郭を構え、義舜が籠城したのもこの山であったとする。さらに義篤が立てこもった金砂山城に、新田氏族や楠木正成が攻撃を加えたという記事は、「佐竹家譜」などを参考にして潤色したもので史的価値は低下する、と評している。

義篤が籠城したのは東金砂山ではなく、西金砂山とする有力な史料が「戸村本佐竹系図」にみえる。そこには「小野崎常道、孫次郎、後ニ政通ト改ム、小野崎一門、佐竹義篤ニ属シ、高氏將軍ノ為ニ西金砂籠城ノ時、忠節ヲ尽シ高名ス、那珂一族ハ宮方楠一味逆心也」とある。それでは、どうして縁起に東金砂山に城郭があったように述べているのであろうか。このことについて、加藤寛斎は『常陸国北郡里程間数之記』で次のように記している。<sup>13</sup>

#### 東金砂山

山ノ形勢ヲ以テ考ルニ、西金砂山ノ堅固要害ノ地ヲ置テ、東金砂頼リノ謂ナシト思ハル、東金砂縁起之内、佐竹秀義等、及三度籠城セシ趣、巨細ニ載タリ、疑クハ中興ノ住侶、西金砂山戦闘之功勲ヲ取テ、東山ニ附会シ後人ヲシテ惑ス売僧ナランカ、

それにしても、東清寺中興の僧を「売僧」と決めこんでしまうのは酷である。

次に「御霊権現当山勧請之事」には、「御当家十七代義治公の御息女、御天死有りて、御祟り有るに依りて、荒人神に祝い奉る」とある。『水戸旧臣記』<sup>14</sup>にも、「御当家御先祖にて御姫様天死。たたりこれ有るに依り、荒人神にいわひまうし、御霊の権現とまうし、東清寺御立てなされ候」とみえる。

御霊権現は、怨霊などの活動によつて、疫病が流行し災害が起こることを恐れて祀ったものである。荒人神は雷や疫病を意のままに発動できる恐ろしい霊異を現す神である。菅原道真も荒人神になったと伝えられている。火雷の奇瑞を示すことから天神ともいわれる。雷を意のままに起こすことができるので、降雨をもたらす農耕神の信仰とも結びついていたのである。

金砂山は、よく雷雨を起こすといわれ、昔から「筑波の雷は半国の雨、金砂の雷は一国の雨」という諺があった。この諺は東金砂山の御霊権現、荒人神の信仰と関連がある。

佐竹義治の娘が若死にして荒人神に祀られたというのは、佐竹氏の支配地に雨を降らして、豊作をもたらしてくれる農耕神になったということでもある。佐竹氏中興の祖といわれる佐竹義舜は、義治の子である。そうすると、荒人神になったのは義舜の姉か妹にあたるのである。

山入氏義に攻められて、金砂山に敗走した義舜は自害寸前に追いこまれていた。そのとき、「雷電冥晦、疾風暴雨、大いに吹き至りて、大木・枯木を倒し」という異変が起こった。そのため「氏義の勢、顛倒して、死せる者十にして七」とあるのも、荒人神となった義治の娘が大雷雨を発動して、義舜の危難を救ったことを物語っているのでは

朝が藤原泰衡追討のため、奥州に発向したとき、佐竹秀義は軍兵を率いて馳せ参じた。頼朝は秀義が挙げてきた無紋の白旗の代わりに、五本骨の扇を賜り、佐竹氏の旗印としたことが記されている。また「御本領安堵の上、建保三年、当山御再興、古昔に倍す。当山の堂社仏閣楼門に、扇の御紋を附けること、この時に始まり、諸社の御印御免許の権輿なり」とある。この記事によると、治承四年（一一八〇）に焼失した金砂山の堂社仏閣が再興されたのは、建保三年（一二二五）であつたことになる。そうすると、のちの縁起類にみえる建暦元年（一二二一）の第六回の大祭礼執行は疑わしい。このときは、堂社仏閣は再興されていなかったからである。

「上総入道義篤公当山御籠城之事」には、建武三年（一二三二）、佐竹上総入道義篤が足利尊氏に味方し、金砂山城に立てこもつたので、後醍醐天皇は新田氏族と楠木氏に命じて攻めさせた。金砂山城の防備は堅固で、落ちなかった。楠木正行は、謀りごとをめぐらし、那珂一族を味方にひき入れて攻撃した。落城寸前だったところに、足利氏族や尊氏將軍の兵がかけつけて救援した。新田氏や楠木氏の軍勢は敗れて退去したので、「終に御運を当山に開いた」とある。

佐竹上総入道は、義篤ではなく貞義を指すので、問題もあるが建武三年十二月二日、佐竹義篤は金砂山より山続きの武生城を打ち立つて、瓜連城を攻撃し、十一日に落城させている。したがって、金砂山城や武生城をめぐる南北両党による攻防戦が展開されていたのである。

「右京大夫義舜公当山御籠城之事」には、佐竹義舜が山入義藤・氏義父子によって太田城を追われ忠義の侍、宇留野源兵衛、滑川大和守、八木備前守、山方能登守、塩谷越前守、介川将監、安藤右京亮、久賀谷彦三郎、片岡監物、矢野孫太郎らを御供として、大山城に至り孫根

城に拠つた。そこから金砂山に入つて城郭を構え、東清寺を本陣とした。東清寺の別当は、三日分の兵糧を奉つたが、糧絶えたので滑川父子は、自ら米を運び軍勢を扶持した。

明応六年（一四九七）、山入氏義ら多くの軍勢を率いて金砂山に攻め上る由を聞いたので、山上より麓に至るまで「搔楯・逆茂木・大関・小関」の用意を嚴重にした。「金砂の衆徒、解脱同相の衣を脱ぎて、不壞全剛の鎧を着し」御供に候じた。しかし、麓の軍は破れて、御敵は雲霞のごとく山上に攻め上がってきた、と記されている。

これらの記事には、佐竹氏の危急のときに際して、東清寺の果たした役割や滑川氏の功績を顕彰していることが目立っている。さらに重要なことは、金砂山の攻防戦における防御施設を述べていることである。山上より麓に至るまで「搔楯・逆茂木・大関・小関」の用意をした、とあるのが注目される。「搔楯」は、垣のように楯をならべることであり、「逆茂木」は、とげのある木の枝をさかさにして垣根に取り付け、敵の侵入を防いだものである。「大関・小関」は、敵の侵入路に門やくいを設けて阻止する施設と思われる。

次に金砂の衆徒が、「解脱同相の衣を脱ぎて、不壞全剛の鎧を着し」義舜の御供に候じた、という文章は、『平家物語』巻第二の教訓状に、「夫れ三世の諸仏、解脱憧相の法衣をぬぎ捨てて、忽に申胄をよろひ」の引用であるにしても、金砂山の多くの僧侶たちが、袈裟を脱ぎすて、堅固な鎧を着けて武装し、佐竹勢に加わっていたことになる。

あるいは、「金砂の衆徒」の活躍は義舜のときではなく、佐竹義重・義宣の時代、東清寺の住持宥玄とその弟子たちの活躍の反映とみることもできる。「上総入道義篤公当山御籠城之事」や「右京大夫義舜公当山御籠城之事」では、義篤や義舜が立てこもつた城が東金砂山のよう

霊区である。ある時、役の公が富士山の嶺から一山を見ると、金色に輝いて音楽が聞こえるので、走り飛んでその山に行くと、仏菩薩の影向があり、明王・天童に囲まれていた。役の公は驚き拝して問ひ奉ると、「これは薬師瑠璃光如来の淨刹である。諸仏の光明に化せられて、砂変じて金色となったので金砂山と言う」と告げた。

「慈覺大師当山中興之事」には、円仁が当山を再興した濫觴を記している。下野国都賀郡の人で、のちに比叡山延暦寺の座主になった円仁が、あるとき五畿七道を見回ったが殊勝の霊区がなかった。ところが常州の地に、三山突兀とそびえ祥雲たなびくを見て登ると比叡山に似ていた。一老人が斧を持って現れたので、円仁は「これはなんの山か」と問うと、翁は「これは薬師瑠璃光如来の淨刹で、文武天皇の御願所である。役小角が草創したが、途中で唐に行ったので一山に三塔はあるが二十一社の神祠がない。どうか和尚がこれを建立してほしい」と語り終わり、光明を放って去って行った。円仁は嘉祥二年（八四九）、比叡山を模して二十一社の神祠を建立した。これが当山の開基である。

「山王二十一社来由之事」と「一山三塔之事」には、比叡山延暦寺戒壇院を草創した伝教大師最澄の事績を顕彰している。その中で、「山王七社の地主権現は、薬師如来の御事と申し奉る。大八王子権現は、日月燈明仏八人の王子が八葉の蓮華に乗り、各々法華經一卷を持ち給いて、近州志賀郡唐崎浜に天降り給うなり」とあるのは、金砂の神が水木浜の大島の磯に出現した、という磯出の神事を思わせる。次に「御尊木の五段の内の三段は、三如来、二段は政所の大黒天・毘沙門堂の仏を造り給う」とあるのは、『華園山縁起』<sup>①</sup>に、

延暦十四年、征夷大將軍坂上田村丸が、桓武天皇の勅をうけて奥州下向のとき、東金砂山、西金砂山、真弓山、豎破山、華園山を

草創した。本尊は大薬樹王の一本を一刀三礼して刻んだ仏像で、本丸は金砂山、樹中は真弓山、中丸樹末は華園山細丸と号して安置し、国家泰平と武運長久の祈願所とした。

とある尊木本身の仏像説話と似ているのである。また、「大師が根本中堂の地引の時、土中に具有るに依り、大師不審に思い給いて、志賀の海辺の翁に問いて曰く、高嶺になんぞ海中の物有るや。翁答えて曰く、釈尊像法の世、仏の御使となり、大智恵の人世に出でて、此の山に於て大乘の法を弘通のために、日本国中の神たち集いて、この山を築き給う。その時、海中の竜王、力を合わせ、ゆえに海中の物を可すしとなり。大智恵の人は、すなわち和尚なり」とある記事も注目される。

伝教大師が根本中堂建立の地引き祭りのとき、土中から海中の具が現れた。それは海中の竜王の仕業だというのである。この話は『譚海』巻八に、金砂明神の神号は蛇形大明神と称し、神体はアワビで水木浜に神輿をとどめて祭礼をすると、夜半に竜神が参拝に訪れる、とみえる物語との関連や「金沙山縁起」の内容にも影響を与えている。

「佐竹冠者秀義公御籠城之事」には、佐竹秀義が金砂山に城郭を構え、源頼朝の軍勢との合戦のことを記している。その中で注目されるのは、秀義の伯父の義季が平忠常の誘いに応じて逆意を企て、「堂社仏閣に火を放つ。茲に因りて、頼朝数万の軍兵を率い、四面に鯨波を唱え、熊谷次郎真実等、先登を進み、城中の軍士衆徒等、数を尽して討たれる」とあることである。この記事によると、治承四年（一一八〇）当時、金砂山上には「堂社仏閣」が存在したことになる。また籠城軍の中には、軍士とともに「衆徒」がいたのである。しかし、『吾妻鏡』の金砂合戦の記事には、「堂社仏閣」や「衆徒」のことはみえない。

「当山扇之御印由来之事」には、文治五年（一一八九）七月、源頼

連年行われていたことが知られる。

以上、戦国時代までの金砂山と佐竹氏関係の史料を見てきたが、大祭礼はもちろん小祭礼に関する記事の片鱗すら現れてこない。祭礼だけではなく、金砂山に関する古代・中世の信頼できる史料は、極めて少ないことが分かったと思う。そのため、近世にまとめられた文書・記録によって、古代・中世の金砂山の歴史を推測・復元する方法が必要となってくるのである。そこで、従来あまり取り上げられてこなかった縁起の検討をしてみよう。

彰考館所蔵の『諸寺文書纂四』に、「金砂両山大権現大縁起」と「金砂山縁起」が収められている。元禄三年（一六九〇）四月に東金砂山別当東清寺より、水戸藩の寺社奉行所に提出したものである。「金砂両山大権現大縁起」は、縁起に記された「金砂山東清寺権現当国勧請之事」によれば、東清寺の住持宥玄は戸村氏の家臣高根周防の二男で、出家したのちも武勇を忘れず、数度の軍功を立て佐竹義昭・義重に目をかけられた。義重が額田城を攻めたとき、戸村撰津守義和の手に加わり、二乗坊と名って出陣、一番の高名をばげんだ。義重はこれに感じて、宥玄を東清寺の住持職とした。慶長七年（一六〇二）、義宣が秋田に国替のとき、宥玄は毎年、湯殿山に参拝していたこともあって、羽州の案内者となり、御兵具五十駄運送の奉行をつとめた。仙北郡で一揆が起こったときも、宥玄の弟子たちが防戦した。義重が下向のうち、寺領百石を賜り、金砂山東清寺を秋田に開基した、とある。

これが秋田の金砂山東清寺滝聖院の始めで、縁起は秋田に移ってきたので慶長八年六月に書き写した、と記されている。しかし、『諸寺文書纂』所収の縁起は、慶長八年六月に書き写した、という記事を載せていない。文政二年（一八一九）に、『諸寺文書纂』の「金砂両山大権現大縁起」を写した中山信名は、「右此縁起従秋田御越被成候故書写

仕候 慶長八年卯六月」の奥書を「文書纂不載之」と注記している。彰考館では、東清寺と佐竹氏との密接な関係を示す縁起が、秋田国替の翌年に写されて残るのを不快に思ったのであろうか。

秋田に東清寺が移ったあとも東金砂山王権現と別当東清寺は常陸に残っている。寺社の完全な移転ではない。佐竹義重・義宣の要請によって、宥玄が東清寺を開基したのであろう。『新編常陸国誌』巻五にも、東清寺「東金砂権現別当ナリ、末寺一ヶ寺奥州ニアリ」とみえ、秋田の東清寺を末寺とみなしていたのである。

東金砂山王権現と別当東清寺は、佐竹氏の秋田国替に伴う混乱や新しい領主である水戸徳川家の厳重な宗教政策によって、中世以来の佐竹氏との関係を有する伝統や文書・記録を放棄したり、変改を試みたことが考えられる。『常陸遺文』所収「金砂両山大権現大縁起」の中山信名の注記には、貞享四年（一六八七）六月吉祥日に、東清寺十三代住僧宥宝が、秋田東清寺に縁起を求めた、としている。旧来のものを処分した東清寺の混乱ぶりがしのばれる。

元禄三年（一六九〇）四月に、東金砂別当東清寺が寺社奉行所に差し出した書付に、「当四年以前に秋田東清寺ヨリ金砂両山大権現大縁起被遣候」とあるのは、貞享四年に秋田東清寺から常陸の東清寺に縁起が贈られてきたことを示している。この縁起の内容は、「役小角当山開基之事」、「慈覚大師当山中興之事」、「山王二十一社来由之事」、「二山三塔之事」、「佐竹冠者秀義公当山御籠城之事」、「当山扇之御印由来之事」、「上総入道義篤公当山御籠城之事」、「右京大夫義舜公当山御籠城之事」、「御霊権現当山勧請之事」、「金砂山東清寺権現当国勧請之事」に分かれている。

まず「役小角当山開基之事」には、次のような意味が記されている。金砂大権現の来由を尋ねると、役の烏婆塞の草創で、慈覚大師再興の

内社になったり、叙位を受けているのに、金砂の神の動静が全くみえないのは、金砂の神が山岳寺院的存在であつたか、あるいは金砂山に日吉山王権現が祀られるのは、九世紀よりもさらに下る平安時代末期になる可能性が考えられるのである。西金砂神社の縁起にあるように、仁寿元年（八五二）から鎮護国家、天下泰平、五穀豊穡を祈願する大祭礼を行ってきたとすれば、祭礼を行う主体は誰なのか。官社でもない金砂山に大祭礼を執行する財力があつたのか。また鎮護国家や豊作を祈る田楽をしたというが、どここの地域の平安を対象としたのか。金砂山周辺なのか。常陸一国なのか。日本全体が対象となるのか。もし金砂山周辺だけでなく、常陸一国を対象とする祈願をしたのであれば、なぜ金砂山がそういう祈願をする必要があつたのか。また豊作を祈願する祭礼ならば、毎年行ふべきであるのに、なぜ七十二年に一度（七十三年目）なのか。そして、なぜ水木浜に磯出をするのか。金砂の神とアワビがなぜ結びつくのか、など金砂山の大祭礼は、多くの謎と疑問に満ちているのである。

## 二

金砂山の「金砂」という地名が文献に最初にみえるのは、『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十一月四日の「金砂城」の記事である。源頼朝に対抗した佐竹秀義が「金砂において城壁を築き、要害を固め、兼ねてもって防戦の儀に備へ」「かの城郭は高山に構ふるなり」とあり、五日の記事に「佐竹が構ふところの塞は、人力の敗るべきにあらず。その内に籠れるところの兵は、また一をもつて千に当たらずといふことなし」とある堅固な城郭が築かれていたのである。

結局、佐竹秀義の叔父義季の裏切りによつて金砂城は落とされ、鎌倉勢は「秀義逃亡の跡に入りて城壁を焼き払ふ」とあるので、かなり

大規模な城郭が西金砂山上に築かれていたのである。『吾妻鏡』の記事を読む限りでは、西金砂山上に寺院があつたかどうかは明らかでない。西金砂山が佐竹氏にとつて、重要な防衛の拠点であつたことは、佐竹氏と金砂山の大祭礼の関係を説明するうえで見逃すことができない問題である。永正七年（一五一〇）十二月の佐竹義舜起請文に、「当国鎮守鹿島大明神、筑波六所、息栖大洗静宮、佐都鷹山大明神、金砂、真弓、花園二十一社、太田八幡大菩薩、村松大明神」とある中の「金砂」は、日吉山王神のことであろう。

佐竹義舜は文亀二年（一五〇二）に金砂城に立てこもり、山入氏義の攻撃をうけたが、かろうじて勝機をつかんでいる。したがって、このころも金砂山には城郭が築かれていたのである。城郭がある金砂山に修験者や祭礼での民衆が自由に立ち入ることが、果たしてできたのであろうか。義舜は金砂山の天候の急変と将兵の決戦によつて山入氏を破り、大門城に前進することができた。この激戦を物語る文書が残っている。文亀二年（一五〇二）六月二十八日と推定される塩谷越前守にあてた佐竹義舜の官途状に、「孫根以来数年之忠節、金砂・大門両所之動神妙之至候」とみえる。<sup>⑧</sup>

義舜は山入義藤・氏義父子の一揆によつて、太田城を脱出し、孫根城（東茨城郡桂村）に拠つたが、明応九年（一五〇〇）正月、氏義の攻撃をうけ金砂山城に入ったことが知られる。天正十七年（一五八九）八月二十七日の佐竹義重判物写に、「金砂山勸進之儀、尤不可有相違もの也」とあり、<sup>⑨</sup>義重は金砂山の建立・修理のための勸進を認めている。また年月不詳の佐竹義重の判物写には、「如先例之十二合目出候、恐々謹言 霜月十五日 義重（花押）西山別当坊」とあり、義重が十二合祭の執行を容認している。<sup>⑩</sup>十二合祭は、西金砂神社で旧暦の十一月十三日に行う神事である。「先例の如く」とあるので、佐竹義重のころは

## 金砂大祭礼と金砂山縁起

志田 諄 一

### 一

平成十五年三月に、金砂山の大祭礼が行われることになっている。七十二年に一度行われるという日本でも珍しい祭礼である。現在の西金砂・東金砂両神社の縁起によると、西金砂神社は大己貴命を祭神とし、東金砂神社は大己貴命と少彦名命を祭神とする。大己貴命は近江国比叡山から鮑の船に乗って水木浜に着かれたので、里人は西金砂山に遷してお祭りした。大同元年（八〇六）三月十一日のことである。

あるいは、天台沙門の宝珠上人が近江国の日吉権現を金砂山に勧請したという伝えもある。そして、鎮護国家、天下泰平、五穀豊穡の祈願のために七十二年または七十三年目の未年ごとに行う大祭礼（大田楽）と七年ごとに行う小祭礼（小田楽）が伝承されてきた。大祭礼は磯出大祭礼と称して、水木浜に磯出をする。文徳天皇の仁寿元年（八五一）に始まり、昭和六年（一九三二）までに十六回の大祭礼が執行されてきた。十七回目が平成十五年になる、というのである<sup>①</sup>。

この祭礼の中心は、天下泰平、五穀豊穡を祈願するための田楽と磯出にある。東金砂神社の縁起にも、小祭礼を除けば同じようなものが伝承されている。これら両神社の縁起には、どれだけの史実が含まれているのであろうか。まず西金砂神社という名で呼ぶようになるのは、元禄十三年（一七〇〇）である。寛文三年（一六六三）に寺社整

理の基礎資料としてまとめられた水戸藩の『鎮守帳』<sup>②</sup>には、「西金砂山王権現社」とあり、別当は定源寺である。東金砂神社は「東金砂山王権現」とみえる。別当は東清寺で東金砂大権現とも呼ばれ、東金砂神社となったのは明治四年（一八七二）といわれている。

もし金砂神社が大同元年以来の由緒があり、天下泰平、五穀豊穡を祈願する大祭礼を仁寿元年から行ってきたならば、古代の史料にみえてもよさそうなのに皆無に等しい。金砂山と同じ久慈郡内にある稲村神社は、洪水や干害のときの祈りに必ず感応があった、というので嘉祥二年（八四九）四月に官社となっている<sup>③</sup>。また貞観十六年（八七四）五月に、立野神は従五位下を授けられ、同年十二月には、正五位上勲七等薩都神に従四位下、従五位下天之白羽神、天之速玉神に従五位下が授けられている<sup>④</sup>。さらに稲村神は元慶二年（八七八）八月に従五位下を授けられ、仁和元年（八八五）五月には、静神とともに従五位上を授けられているのである<sup>⑤</sup>。

『延喜式』神名上にみえる久慈郡七座にも、長幡部神社、薩都神社、天之志良波神社、天速玉姫神社、静神社、稲村神社、立野神社の名があるが、金砂の神はみえない。しかし金砂の神と同神を祀る大洗磯前・酒列磯前両社は、天安元年（八五七）八月に官社となり、同年十月には、薬師菩薩明神と呼ばれるようになる<sup>⑥</sup>。

久慈郡の薩都神社、天之白羽神社、長幡部神社やその他の神社が式